

「それでは、どのようなものか、どのようですか？」

驚いた武帝は更に質問しましたが、達磨は行動そのものに捉われず、心の静寂と悟りを求めるべきだと説きます。

「真の智慧と円満な境地は精神的であり空寂そのものであり、その功徳はこの現実社会には求めようがないのです」

「見かけだけの功績は禅では無意味なものです」

と説いたのです。

もうこの時点で武帝は仏教を深く学んでいました。それでもまだ仏教を世俗の視点からしか理解していませんでした。

つまり、世間の知恵や生き方よりも優れたものを探したのですが、それは世間的価値の延長でしかないのです。もっと賢くなる、豊かになろうと努力しても、その努力は無意味だと達磨は断じます。

もし坐禅が胆力を養うための手段であったり、国家発展のための事業であったり、病気の治療であるならば、それは世間の法、すなわち処世術や健康法、人心操作であり、決して達磨の禅ではありません。文化的発展のためというのにも世間向けです。

達磨の武帝への答えは、壮麗な寺院の建築や美術の啓蒙は、有為(この世の全ての現象や存在)の功績だからこそ、無功徳と断言したのです。

人間は世の中で縛られ、抜け出せない状況に陥ることがあります。誰もがそうした束縛を持っていますが、一度それから解放されると重荷が下り、心が軽くなっています。この体験をしていない人は、どんな偉い人物でも、達磨の前で対等に話すことはできないのです。



梁の都 金陵



日の明け方に妻の夢を見ました。それが何と、庭に咲いたあじさいの花を妻が笑顔で覗き込んでいます。姿だったのです。だから私は会社から帰るとすぐ、庭のあじさいを妻の仏壇に供えたのでした。

妻が亡くなってから、何度か夢を見ましたが、でもそれは、妻が病気で布団の中で休んでいる夢でした。私がその体を抱きおこし、「あよかった、生きていて」という、そんな夢ばかりでした。

朝、目をさますとあの白い蝶をさがしました。しかし、もうその時、蝶は部屋の中にいなくなっていました。窓はみんな閉めてあり、どこへも出られないはずなのに……

は、どこから逃げたのだろうか？ そう思うと、本当にあの白い蝶が妻に思えてなりません。馬鹿なこととも思っても、でも、どう考えた

しまったよかったです。朝、目をさますとあの白い蝶をさがしました。しかし、もうその時、蝶は部屋の中にいなくなっていました。窓はみんな閉めてあり、どこへも出られないはずなのに……

は、どこから逃げたのだろうか？ そう思うと、本当にあの白い蝶が妻に思えてなりません。馬鹿なこととも思っても、でも、どう考えた

つてそんなことがあはるはずがないと、何故か、どうしてないのか。外へは逃げられないのに、いつもなら、気にもとめないこんな事が、妙に私の心にひっかかるのです。やはり、あの蝶はきつと政子だったに違いない。たしかにそうだ。

ひとりのようになって、頑張るって生きていこうとしている私に会いに来たんだ。でも、そんな馬鹿なことが……

思いながらも、私はそう思うことにしたのです。

そうするとまたいつかあの白い蝶が、私のもとへ飛んできてくれるという期待が胸の中で膨らむのです。他人に言えは笑われる、妻を亡くして気が変になっと思われ、に違いない。

しかし、娘たちには電話でこの話をしました。どうしてもこの気持ちを聞いて欲しかったのです。

話を聞いた長女は、「お父さん、お母さんが蝶になって会いに来たんだよ、

お父さんのことを、心配して、きつとまた来るよ」そう言うてくれました。

次女も「お母さんだよ、それは、お母さんの霊が蝶になつて、飛んできたんだよ。私も信じるわ」娘二人は真剣にそう言うてくれました。

それだけでいい。

六月二十四日、小雨降る夜の出来事でした。私の心の中に、いつまでも忘れられない、本当はただの迷い込んだ蝶か



お父さんのことを、心配して、きつとまた来るよ」そう言うてくれました。

次女も「お母さんだよ、それは、お母さんの霊が蝶になつて、飛んできたんだよ。私も信じるわ」娘二人は真剣にそう言うてくれました。

それだけでいい。

六月二十四日、小雨降る夜の出来事でした。私の心の中に、いつまでも忘れられない、本当はただの迷い込んだ蝶か

お父さんのことを、心配して、きつとまた来るよ」そう言うてくれました。

次女も「お母さんだよ、それは、お母さんの霊が蝶になつて、飛んできたんだよ。私も信じるわ」娘二人は真剣にそう言うてくれました。

それだけでいい。

六月二十四日、小雨降る夜の出来事でした。私の心の中に、いつまでも忘れられない、本当はただの迷い込んだ蝶か

追記

もしれない。でもどっちでもいい、娘たちが信じてくれたこの白い蝶を、私はいつまでも私に会いに来てくれた亡き妻と信じ、その想いを胸に、頑張るって生きていこうと思えます。

本当はどっちか分からず、それでも信じて生きて行けるのも、私たち人間なのです。

私たちの人生において「わからない」

「わからない」と心から納得することができれば、大久保さんのように、きつと自然体でポジティブに生きて行けると思っています。

しかし、無理に理屈をこねて理解しようとする、また根拠を求めようとする

ことは、確かに心配で、恐ろしいことかもしれませんが、自分が学んだ知識や蓄えた経験で、何とか答えを導きだしたいと思うのは当然のことと思えます。



達磨と武帝の対談

本拍久持摩高

二十九年間、苦業を共にした妻が逝ったのは昨年の十二月十五日です。暖冬の冬も、この日は、底冷えのする寒さでした。

夕方、お風呂を掃除していた妻は、やや風邪気味のようにでしたが、朝は熱もなくなり元気がいつも家事のスケジュールをこなしていました。当然、私は心配することもなく、いつものように出勤しました。

ところが、私がいつものように仕事をしつて夕方帰って来ると、家の前に赤いランプが点滅する救急車が止まっていたのです。不吉な予感が私の脳裏を走りまわりました。「まさか」とは思いませんでしたが、この予感の中にしてしまったのです。

家に入ると、妻が廊下で救急隊員に心臓マッサージを受け、もう一人の隊員

が、酸素吸入をしているのです。妻の身に何が起きたのだらう？その光景を、隣家の住人と次女が居間のドアのところで心配そうに見つめていました。私もまた、何が何だか分からないまま、何もしてやれないいらだちを感じながら、呆然とするばかりでした。

そして、どの位時間か経過したのだろうか？救急隊員が妻の両眼を、懐中電灯で照

らし、うなずき合つて、妻の身体を救急車に運びました。この時すでに妻は、こと切れていたのです。救急車は市立病院へ向かいまわりました。でも、この時は、私も隣家の人も次女も妻が死んだとは気づいていませんでした。

こうして、急性心不全のため、妻は、五十六才になったばかりの人生を、あまりにも突然終えてしまったのです。

私は何ともいえない絶望感、悲しみ、空しさの中で生きる希望さえ失いかけていました。

そんなふうにして半年が経つたので



きて来られたものだと思います。決してオーバーではなく、そう思いながら漠然と社会の動きに身を任せながら過ごしてきました。

少し梅雨冷えする今月三日、雨戸も玄関のガラス戸もみんな閉じてあるのに、その夜十時過ぎ布団に入ろうとすると、出窓の花瓶に差してある、青いあじさいの花に白い蝶がとま



ていました。私は何気なくそばに行くと、蝶はひらひらと舞い上がり、私の手を出すと私の指にとまりました。しばらく私は、その白い蝶に見入っていました。すると蝶はまたひらひらと舞って、また出窓のあじさいの花にとまると

私はその時「政子か？」本気でそう思いました。そんな馬鹿な事があるはずはないのに、そんな気がして、いやそうであって欲しくて、その蝶が何ともいとおしくなりました。そっと手のひらの上にとませようと



数年前から、梅雨時には鮮やかな花を咲かせるようになりました。昼間それを何本か切つて仏壇に飾つた残りの花を出窓の花瓶に挿したのです。蝶は花にとまり、舞い上がり、そしてまた花にとまると

私ほじつはその前

# 亡き妻の化身

投稿者 境聖原 大久保英雄 (仮名)

達磨が「無功德」で喝破し、「世を以て求めざれ」と説いたのは、武帝に一息つかせるためでした。

この一息で有為の法から脱出すること道元は「諸縁を放下し、万事を休息す」と言いました。つまり、全てのひっかかりを放つて休むという事です。

達磨の禅は、修行して特別な能力を身につけさせるものではなく、万事を休息させようとするもので、古来より禅は「安楽の法門」と呼ばれています。

執着の中で争いを続ける限り、比べ合う限り功德は得られません。有為の働きは実際には役立たないのです。ウクライナ紛争も本来その価値はないのです。

多くの、世の人々の事業、競争、闘争、紛争は一時的な幻影に過ぎません。これで葛藤することはまったく無意味です。

重要なのは、その

葛藤の重荷をおろして休息することです。これが達磨の言う「空寂」です。空寂とは、双方からの統声（しやうせい）が止み、静寂（じやうじやく）が訪れる状態のことです。

「世を以て求めざれ」という達磨の言葉は武帝には理解されませんでした。

武帝がさらに問いかけて、

「それでは聖なる真理とは何ですか？」

達磨は答えました、

「ただ空っぽで聖なるものはありません」

武帝の質問は、当時の仏教教義に関するものです。

教義には真諦（しんてい）と俗諦（ぞくてい）という概念があります。真諦はすべての物が「空」であることを示し、俗諦は「空」が虚無ではなく、「空」と「色」が同じであることを示します。この二つの概念を一つとして認識

することが聖諦とされていきます。

武帝は聖諦の究極の結論とは何かという質問をしたので

この認識の仕方は、現代の言葉で言う弁証法です。色即是空と空即是色の対立を統合する、高いレベルの立場が聖諦です。

達磨は、この弁証的立場の聖諦をも否定し、

「廓然無聖」

と表現しました。

「廓然」とは、からりと開けた、何のとりわれもない無心の境地を表したものです。その無心そのものには、聖なるものも、凡なるものも、何も比べるものは無いと切り切るのです。

自分が信じて求めてきた仏法というものが、「聖なるもの」がないと言われた武帝は、どうしても納得がいきませんでした。今までの行為の全てを否定されてしまったからです。

そして、そんな達磨に対して、さらに問いました。

「では、私の前にいるお前は何者か？」

達磨は答えます。

「不識」

この「不識」は「そんなもの、知らない」という意味の言葉ですが、禅の解釈はそう簡単にはいきません。

達磨が「不識」と言ったのは、武帝の心にある「執着」を捨てさせるための大慈悲心だったのです。

人間はどうしても、暗とか雨とか、生とか死とか、有るとか無いとか、好きとか嫌いとか、対立する二つの思考にとられてしまいがちです。禅ではどうか、この対立する二つの観念を嫌います。

「識る」と、「識らず」と、自分が生まれてから身につけてきた知識や経験に惑わされることなく、それらを完全に捨て去つてこそ、禅でいうところの「不識」を

体得することができると

よく私たちは「識る」を自慢しがちです。話の合間に、あつ、それ「知つて、知つて」とよく言うやつです。

ところで、私たちは「一知つて」と確信をもって言えることは、どのくらいあるでしょうか、世界情勢、トランプは？ ウクライナは？ 隣国は？

結局、私たちの人生

は知らないことだらけです。明日、自分自身が生きていくかわからないし、いつ？どこで？なにで？死ぬかも分からない。

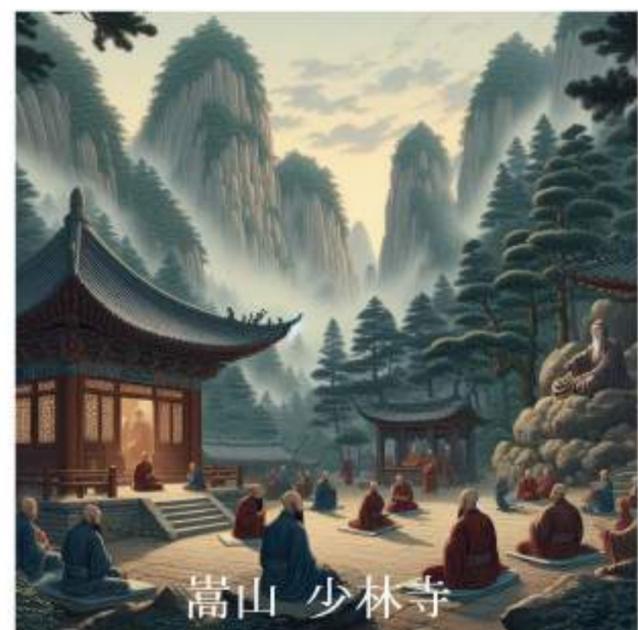
道元はこう言います。

「仏道を学ぶという事は、自分を学ぶことです。自分を学ぶという事は、自分を忘れることです。自分を忘れるという事は、身心が解放されることです」

「自分を忘れる」ことが「不識」の意味なのです。

しかし、武帝はこの時点では、理解できませんでした。

達磨は教えが届かないことを知り、十月十九日に密かに江北を回り、十一月二十三日に洛陽に到着しました。後魏孝明の太和十年のことです。嵩山少林寺に滞在し、壁に向かって黙然として坐つたので



次号に続く